

研究課題名	Epidermal growth factor receptor-tyrosine kinase inhibitor (EGFR-TKI) に耐性化した EGFR 遺伝子変異陽性肺腺癌における Programmed death ligand-1 (PD-L1) 発現の検討
研究責任者名	広島大学大学院医歯薬保健学研究科 教授 服部登
研究期間	2018年7月17日(倫理委員会承認後)～ 2020年3月31日
対象者	<p>1) 2000年1月から2018年4月に広島大学病院・東広島医療センターでEGFR遺伝子変異陽性の肺癌と診断された患者さん。</p> <p>2) EGFR-TKI投与後に化学療法による治療を施行されていない患者さん</p> <p>3) 病理解剖がなされ、病理検体の保存に同意が得られている患者さん</p>
意義・目的	<p>本研究ではEGFR遺伝子変異陽性肺癌に対してEGFR-TKIが投与され、その治療の後に病理解剖された複数の検体を用いて腫瘍内のPD-L1発現と分布を検討することを目的としています。</p> <p>本研究では通常得ることのできない、複数例におけるサイズの大きな病理解剖検体を利用することにより、今まで得られなかったEGFR-TKI耐性時の腫瘍内のPD-L1発現状況が確認できる点に意義があると考えられます。</p>
方法	<p>本研究では、診療録等の過去の診療情報及び既に採取して保存している試料(パラフィン包埋された肺癌組織)を用います。ここで使用する診療情報は年齢、性別、肺癌の病期、喫煙歴、Performance status、病理組織型、EGFR遺伝子変異などです。共同研究施設の東広島医療センターの試料および臨床データは当院へ郵送します。</p> <p>パラフィン包埋された肺癌組織検体は原発巣と転移巣で5μm厚で20枚ずつ薄切し、プレパレート作成、または遺伝子解析に利用します。</p> <p>① EGFR-TKIが効かなくなった後の原発巣と転移巣内のPD-L1の発現の程度や発現分布を評価します。PD-L1の免疫染色は当院の病理部と検査会社のSRLで行います。</p> <p>② EGFR-TKIが効かなくなった後の原発巣と転移巣内のPD-L1の発現の程度、発現分布とEGFR-TKIの治療効果を比較します。</p> <p>③ EGFR-TKIが効かなくなった後の原発巣と転移巣において、癌細胞の遺伝子異常の出現とPD-L1発現の関係を明らかにします。遺伝子異常の有無は当院で検索を行い、一部はSRLに委託します。</p> <p>東広島医療センターでは、倫理委員会により癌細胞から抽出されたDNAが保存されていますので、ここではこのDNA検体も利用します。</p> <p>(個人を特定可能な情報は解析に用いません)。</p>
共同研究機関	東広島医療センター；研究代表者 村上周
試料・情報の管理責任者	広島大学大学院医歯薬保健学研究科 教授 服部登
個人情報の保護について	

調査内容につきましては、プライバシー保護に十分留意して扱います。情報が個人を特定する形で公表されたり、第三者に知られたりするなどのご迷惑をお掛けすることはありませんのでご安心ください。

研究に資料を提供したくない場合はお申し出ください。お申し出いただいても不利益が生ずることはありません。

問合せ・苦情等の窓口

〒734-8551 広島市南区霞 1-2-3

T e l : 082-257-5196

広島大学病院呼吸器内科 助教 益田 武

研究機関：広島大学